

ネエエクスト、アーティスト、イズ……ゼイアー……トラジディーズ！
オーケー、ボーイズアンガールズ！ ネクストナンバー、イイイイズ、リヴェンジ！

『尼寺へ行け 尼寺へ行け』

お前の幸せは 世を捨てた先の場所

そうだお前はオフイリア、どうせこの世にや生きられない
川にでも流れて そのまま何処かに消えてしまえ

リベンジ このままじゃあ終われやしない

リベンジ お前が生きては俺は死ねない

リベンジ 剣を取り胸に突き刺せ

リベンジ 次はお前が死に絶える番だ』

ざわり——。

「あれ、あってねえよな。何だ今の……？」

「もしかして外したんじゃないか？」

「いやでもこの歌詞は無えなあ……」

『生きるか死ぬか 何が問題？

敵か味方か それすら問題外？

リベンジ このままじゃ終われやしない』

「……おい今」

『リベンジ お前が生きては俺は死なない』

「いや、ねーわ。コレないわ」

『リベンジ 剣を取り胸に突き刺せ』

「……うわああのギター前に出すぎ」

『リベンジ 次は俺がお前をブチ殺す！』

——終わった。何もかも、終わってしまった。

雨が振る中、純情商店街を歩きながら自分は深く息を吐いていた。将来の希望が全て潰えたと言っても間違いではない。バイトで食っている限りは多少はマシであろうが、未来への希望が全て絶たれた状態でただ食べて飲んで寝て働いている状態は、果たして生きていると言えるのだろうか。

インディーズ・ブームももう今からすれば彼方に消え去っている。それでもデビューを望んで、ギターを取る輩の数は決して少なくない。ネットではボーカロイドがあればバンドは要らない、と言う暴論さえ出始め、オリコンチャートは大々的に売り出されたアイドルの曲が舐め尽くす。

それであっても、自分の叫びのためか女にモテたいためかは分からないが昔ながらのライブハウスで歌のために声を張り上げる。

バンド・ミュージックが死に絶えたミュージックシーンで生きていこうなどと言う夢想、けれどその下に日の当たる場所へと出る事が無く解散していくアーティストはどれくらいあるだろう。少なくとも、自分たちがその場所へと辿りつけないことは明白だった。参加していたバンド、『トラジディーズ』の解散である。

『もうテメエ等には付き合ったらんねえよ！』

居酒屋の中に響いたハムレットの声が耳を貫く。ガチャン、と叩きつけられたグラスが割れて、土間にビールとともに飛び散った。『お客さん！』と大声で怒鳴る店員

の聲が聞こえる。騒然としていた店内が一瞬、シン、と静まりかえった。だが、当人たちにとってはお構いなしの様子である。

『お前みたいなボンボンに取っっちゃ売れなくても構いやしねえけどな、俺にとつては命掛かってんだよ！』

『ボンボンの遊びだとか抜かしたなテメエ!!』 大体テメエ自分が原因で何ほざいてやがんだ、ソロで外しやがってお笑いじゃねえかよ！』

『うっせえ、アドリブでいいんだよアレは、大体テメエもだロミオ、お前の声の張りが足りないのも問題なんだよ！』

『どう考えてもテメエだろうが、抜かせ！』

ハムレットとオセローが互いの胸ぐらを掴み合う。無論、バンド名に合わせた芸名であり、ハムレットと呼ばれた方の本名は芳賀礼人であるし、オセローと呼ばれた方は大瀬拓郎であるし、どのみち世に言うキラキラネームをつけられた訳ではない。そもそもそんな流行がまだ無い時代の生まれだ。ロミオ、と呼ばれたのは自分のこと。六戸修司をどう読んだらそうなるのかは分からないが、ともかくも自分はバンド内ではその名前で通っていた。

『落ち着いてくれよ二人とも！』

胸ぐらをつかみ合っている二人を止めようとすが、当人たちは完全に頭に血が上ってしまっていて話しを聞く様子すら見えない。きつとキーボードのリアが居たのな

ら、拓郎ももう少しは落ち着いていたのかもしれない。彼女がバイト中なのが悔やまれるところだった。

この場にもう一人いるメンバー、マクベス……もとい、真鍋久志はただ二人の様子を見ることもなく目を閉じて腕組みしていた。聞こえてはいるようだが、自分から口を開く様子は彼にはない。呆れて物も言えないのかもしれない。構わねえがガキでも好きに作ってる！」

『この野郎！』

ガツ、と鈍い音が聞こえた。振りかぶられた拓郎の拳が礼人の右頬にめり込んだのだ。堪忍袋の尾が切れた拓郎がもう一度礼人を殴りつけようとするのを、自分は必死に押さえ込む。

『やめろって言ってるだろうが！』

『もうやってらんねえよ、好きにしやがれ！』

礼人が怒鳴り声を上げて、そのままギターだけ担げば飛び出していく。一瞬だけ周囲の客も動きが止まってしまうが、またすぐに元通りの喧噪がテーブルの間に満ちていった。

『あの野郎……』

当人が出ていってしまったってしても押し殺せない憎悪が満ちた声を上げて、拓郎が戸口の

方を見やる。ただの怒りでは済まないであろうその様子に、冷静さの欠片も感じられなかった。

『解散するしか、無いか』

不意に、ぼそり、と久志の低い声が聞こえた。何かを押し殺すようにも聞こえるそれに、自分の背が強ばるのを感じる。拓郎が久志を今にも殺しそうな視線で睨めつけるが、それを受け止めながらも彼は落ち着いた表情で言葉が続けた。

『どの道俺にはもう金も若さも無い。深夜の土方で食うにはライブの時間が合わないからな』

『ああそうか、好きにしろよ！』

頭に血が上がったままの拓郎が大声を上げる。精神的に参ってしまっているようで、自分の頭をぐしゃぐしゃとかき乱した拓郎は空になったビールの瓶を床に叩きつける。がしゃあ、と言う音と共にバラバラになった破片が四方へと飛び散った。

『お客さん。すみませんがもう出てってくれませんかね！』

店主が怒鳴り声を上げた。我慢の限界だったようで、強く拳を握りしめて自分たちのテーブルの前で思い切り睨みつけて来る。

『ロミオ、お前ももう諦めて現実を見ろ。このバンドじゃどうやっても食っていけない。スポンサーも付いていない、特に何か強みがある訳でもないこのバンドに未来は無い』

テーブルに代金を置きながらの久志の声が耳に痛い。確かに、夢のために現実は苦しい生活を強いられているし、対バンを張れば見劣りしてブーイングの山だ。けれど、それでもまだ三人残っているのならやることは出来るだろう――。

『“トラジデイズ”は解散する、ああもうそれで良いさ！ お前もどっか行けよロミオ!!』

けれど、自分が抱こうとした希望は、まるで先ほど床に叩きつけられたビール瓶のように微塵に打ち砕かれた。

キーボード担当のリア、もとい橘梨亜へも今頃拓郎から解散という話が伝わっているだろう。紅一点、かつ拓郎の彼女としてリアがどう言った話をするかの想像は全く付かないが、そのことについてとやかく言う権利は自分にはない。

ともかくも、である。明日以降どうすれば良いのか。一人で参加できるバンドを探すにもアテなど無い。純情商店街の北三丁目から、公園側に向かう角を曲がった先、暗闇を街灯が薄ぼんやりと照らし上げていた。

「真面目に就職して働いた方が、自分のためかな……」

呟いた自分の言葉の空々しさに、口元に乾いた笑みが浮かぶ。選ばなければ就職先が全く無い訳ではない。ホワイトカラーの就職が幾ら厳しくともブルーカラーの就職は出来なくはないだろうし、ギャンブルや風俗に関わる職はほぼ常に求人が出ている

と言つても過言ではない。

無論そのうちどれほどが働き続けられるかも分からないし、受けもしていない面接に受かるほど世の中は甘くない。大学の新卒でも仕事が決まらないような時代で、正社員で食べて行く事など簡単に出来る訳も無かった。

日付が変わつて四半刻程経過したあたりに店を出た。あと十五分もすれば、三鷹行ききの終電が出るだろう。

明日の昼過ぎからはバイトが入っていて、日が変わるまで帰つて来れない。疲れが溜まることは最初から分かっているのに、早い内に寝ておきたかった。喧嘩沙汰と宵の風の冷たさで酒気が粗方抜けていたのだけが幸いである。

「ん……？」

と、アパートの前に差し掛かったところで違和感を感じ、立ち止まる。薄ぼんやりと灯る、階段を照らす蛍光灯。チカチカと揺らいでいるあたり、寿命も近いのかもしれない。鉄骨で出来た階段の途中に、膝を抱えた子供が疲れた瞳で床を見つめていた。

子供、と言つても中学に入ったくらいの子供だろうか。一応、両隣と下の部屋には挨拶を済ませているし、十部屋も無いようなアパートで一年も住んでいれば大体の住民は顔を合わせるはずだし、

引越しがあればすぐに分かる。

けれど、自分はその子供の顔を見た事は無かった。容貌は幼さを残しながらも、少

し大人びた表情のせいもあってかあまり子供らしく感じられない。側頭部に黄色いリボンで結ばれたポニーテールも力がないように見えた。青と白のワンピースのような服、丁度胸元に黄色のリボンがアクセントのように結ばれている。

こんな夜更けに、家出か何かだろうか。放っておくにも彼女の横を通り抜けなければならぬ。どうしたものか、と足が止まる。すると、彼女が顔を上げてこちらへと視線を向けた。

青み掛かった彼女の瞳と、自分の視線が交錯する。疲れが顔に滲み出ていたが、幼いながら綺麗だ、と言える程度の容貌。きつと、中学生くらいだろうか。

子供がこんな時間に出歩くもんじゃない、と注意する事は出来るけれど、果たして自分がマトモな成長をした大人かと言われれば、答えはノーだ。高校に入るくらいには夜通し遊んでいた事もあったし、補導されかけた事も一度や二度ではない。家出娘の友達が誰一人余裕が無かつただけだろう。

「あの」

と、不意に彼女が唇を開く。疲れが滲む力の無い声。掠れ気味の、鈴虫の鳴くような声が耳朶を伝う。

「何か、食べ物、頂けませんか……？」

それが、彼女と初めて交わしたコミュニケーションだった。